

令和7年度

第4回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和8年2月10日(火) 10:00~12:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂



3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問1名
杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)
丹後「子育て」サポート協議会委員3名
多々納智(京都府宮津天橋高等学校 教諭)
櫛田啓(社会福祉法人みねやま福社会理事長)
野木俊宏(京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長)
稲本朱珠(与謝野町高校魅力化コーディネーター)
各市町教育委員会担当者
事務局(丹後教育局)

4 報告

- ・高校生意識調査アンケート協力校との意見交流について
- ・令和7年度中の協議会メッセージの発信実績及び協議概要について協議

5 協議「今年度の協議のまとめ・来年度の協議の方向性について」

(1) 丹後の『子育て』環境づくり関係者の協働を生むためのメッセージ発信をどうするか

① 具体案

- ・子育て支援団体を集めて「京都府知事と行き活きトーク」開催を目指す。ここでの丹後「子育て」サポート協議会の発信が丹後への発信、ひいては京都府への発信になるのではないかと。京都府の中の丹後地域としても泥臭く特色を出せるのではないかと。
- ・京都府子育て環境日本一推進会議×Woman exciteのWEラブ赤ちゃんプロジェクト「泣いてもかましまへん!」ステッカーのように視覚的に印象を残すのもよいのではないかと。
- ・メッセージの教育界における位置付けや強制力を整理した上で、やはりメッセージが実践と繋がらないと親も教育者も腹落ちしない。実践が見えると、具体的な言葉かけが変わったり、行動に移したりする人が増えるだろう。
- ・メッセージを実践という形にしている野木委員や多々納委員がロールモデルとして伝え人になっていただくことも検討できるのではないかと。
- ・「子育て」の実践家を丹後教育局主催のPTA指導者研修会の講師に招き、発信の機会にできるのではないかと。
- ・実践の収集という点で、動画や記事があればメッセージの理念を理解されやすいのではないかと。例えば様々な団体の広報活動の中に、「子育て」につながる取組が存在しているのではないかと。新しく何かを作るのではなく、既存のものを活用した「取組集+メッセージ」という考え方もよいのではないかと。

- ・メッセージと繋がるチェックシートがあってもいい。「メッセージは理解できる。では何をすればいいの?」となった場合、手本となる行動を示すものにもなり、自分の子どもとの関わりを振り返る機会にもなる。ただし、子どもの年齢、家庭状況、校種等によって見方が違ってくるため、項目内容を細かくすると専門性が出てきてしまう。「はい」「いいえ」や度合いで気楽に答えやすいものもいい。

- ・家庭教育支援に係る中学生と乳幼児の母親が交流する事業や、小学生の入学説明会と併せて開催される同学年の親同士が参加する事業等、様々な思いをもった世代が交流する場でメッセージをきっかけに立場を越えた対話ができるのではないかと。

- ・対話が生まれる場にメッセージを記したカードのような媒体があるといい。

② 大人の認識へアプローチする上で理解しておくこと

- ・子どもが主体的に活動する姿が親の意識を変えることもある。実践による変化が大切である。

- ・就学前施設の活動では子どもに委ねるところが増えているが、怪我が減少している。これまでの「みんなで頑張りよう」という姿勢が、子どもを頑張りさせ過ぎていたのかもしれない。一人一人違えば、頑張り方もそれぞれのペースでいいはずだが、一律の目標をかかげることは、個人に合わない無理なものである場合も考えられる。

- ・学校教育でも探究活動に関わる教員同士の交流の中で、小学校では、「学びの集団づくり」の視点、高校では「個の成長」の視点という印象を受けたことがある。確かに学校の外での体験学習を思い起こしても、集団の目標や協力を重視した集団づくりの印象がある。

- ・学校教育でも子どもの主体性を大切にしたい取組にチャレンジしているところもあるが、親の価値観で子どもを評価するため、子どもの思いが置き去りにされる例も見受けられる。親が納得できるように丁寧な説明も必要になるが、実践が曖昧で示されていない状況では親へ理解を求めるのも難しいだろう。

- ・大人は自分たちが育てられたように育てるという思考が働くため、教育の在り方が変化しつつあるが、変化に対して抵抗を感じる親もいる。

- ・就学前施設での子どもの主体性を大切にしたい幼児教育による子どもの変化に親も少しずつ気付いている。そこで育った子どもがやがて小学校に上がれば学校も親も変わっていく。今はまだ幼児教育の在り方が学校教育に入り始めた過渡期である。

- ・大人がどのような環境設定を行うか。例えば既存の枠組みがあっても、子どもがヒト・モノ・コトにであい、自分で問いを立てられるように中身を変えたり、余白を作ったりすることで、子どもの力で学びが深まる。

- ・メッセージの理念を子どもに関わる人が知り、実践が出来上がることでその子どもの親にも伝えられる。そのためにも子どもに関わる人の現場でも学ぶ機会が必要である。まずは、協議会のメンバーの職場や関係個所でメッセージの理念を広げていく。学校教育への働きかけも必要である。

- ・家庭教育という場は特に閉鎖的な印象を受ける。だからこそ、PTAでの研修会等、多様な立場、価値観をもった大人同士が集まり、対話する機会にメッセージを活用することは現実的であり、効果的だといえる。

- ・メッセージに込めた理念を大人が実践に落とし込んで文化にしていくのは非常に難しいが、ここでの協議自体が高いハードルの位置まで高まっているということでもある。

- ・大人の腹落ちを求めたい。そして前向きな雰囲気、プラスの同調圧力を生み出したい。

(2) 来年度の協議の方向性について

- ・協議会メッセージの浸透・ロードマップ・首長部局及び学校教育との連携
- ・高校生意識調査アンケートの実施



6 助言(杉岡顧問)

(1) 本協議会について

- ・今回の衆議院議員選挙に係る選挙事務について、各市町職員は短期間での準備・対応が求められた。しかし、国政選挙も各市町職員による対応が当たり前という認識に疑問の声も上がっている。様々な事柄について、時代に合わせたやり方を議論し、見直す時期に来ている。
- ・投票用紙を例に挙げても電子か紙か。メリット、デメリット、リスク管理、多面的に捉えれば結論は急げない。そのように道に迷いそうになったら原点へ。本協議会は、そういう場であるべし。

(2) 発信について

- ・発信とは双方向性があり、発信力と受信力がセットと捉えるべきである。
- ・発信を少ない人数で担っていくことは厳しい。効果的な発信の一つには、発信者を抜本的に増やすということがある。SNSで、みんながハッシュタグを付ける状況をつくることもその一つ。ただし、みんながハッシュタグを付けたくることが条件になる。
- ・発信が広がるための視点のもう一つに著作権がある。その成功例として「くまモン」がある。「くまモン」は著作権のハードルを下げ、申請さえすれば基本誰でも自由に使用できるようにしたため知名度が上がった。
- ・AI活用の時代に入っている。0円コストで作れるメリットを生かすことも検討できる。
- ・現代の日本人ならではの広がり方に「推し活」「リツイート／シェア」や「ポイ活」がある。推したくなるようなもの、共有したくなるものにする事で広がる。ポイントが貯まるのが好きな性質を生かし、「子育て」に係る言動でポイントがもらえるというものがあってもいい。
- ・発信に係る仕掛けをどうするか。税金を投じることは難しいと考えるならクラウドファンディングを活用すればよい。公教育でもクラウドファンディングで資金を集める時代である。
- ・クラウドファンディングにおける「三分の一の法則」の発想を生かし、着火剤とする最初の3割の身近な人を例えば1年生保護者としてカードを配付、そこから次の3割の身近な人の周りの人へ、その次の3割の面識のない人へと勝手にメッセージが広がっていくように仕掛ける。
- ・動画やポスターでもメッセージが独り歩きして広がるのがポイントである。
- ・これからも発信するための議論を広げることが重要である。